

## はじめに

奈良市油阪町に所在する開化天皇春日率川坂上陵では平成20年11月から平成21年3月にかけて鳥居の改築工事が行われ、それに伴って平成20年12月から平成21年2月にかけて立会調査を実施した。その概要については本誌第61号において報告したところであるが<sup>(1)</sup>（以下、「前稿」とする）、その際に遅れていた出土遺物の整理が完了したので、それに伴う所見の変更とともに報告しておきたい。

遺構および出土遺物については大和郡山市教育委員会・山川均氏より様々なご教示を得た。また、出土遺物の実測および製図・撮影にあたっては陵墓調査室・横田真吾氏の全面的な協力を得た。記して感謝申し上げる。なお、本稿において遺物の理解等において誤りがあれば、その責は全て筆者にある。

## 遺構について（第36図）

当陵拝所に存在する近世墓地遺構から発見した瓦質甕等については、これまで火葬骨を埋納したものとして「蔵骨器」と呼称していた<sup>(2)</sup>。しかし、前稿の註（7）でも触れた人骨や歯の残存状況に加え、他遺跡における類例を知るに及び<sup>(3)</sup>、遺骸を埋葬した「土器棺」とするのが妥当であるとの結論に至った。ただし、以下の既述では前稿との整合性を保つため、遺構名は「蔵骨器」のままとしているので了とされたい。

遺物整理の進展の結果、前稿では土器棺本体から遊離した大振りな破片と判断して欠番とした「蔵骨器6」について、周辺の土器棺とは別個体であることが判明した。残存しているのは口縁を含むごく一部ではあるが、他の埋葬行為や拝所となって以降の工事によって破壊された土器棺である可能性があるため、新たに埋葬施設として「蔵骨器6」を認定しておきたい。

蔵骨器6は蔵骨器11と骨2の間に位置し、レベル的には両者よりも上方となる。瓦質甕を倒置していたものと思われる。

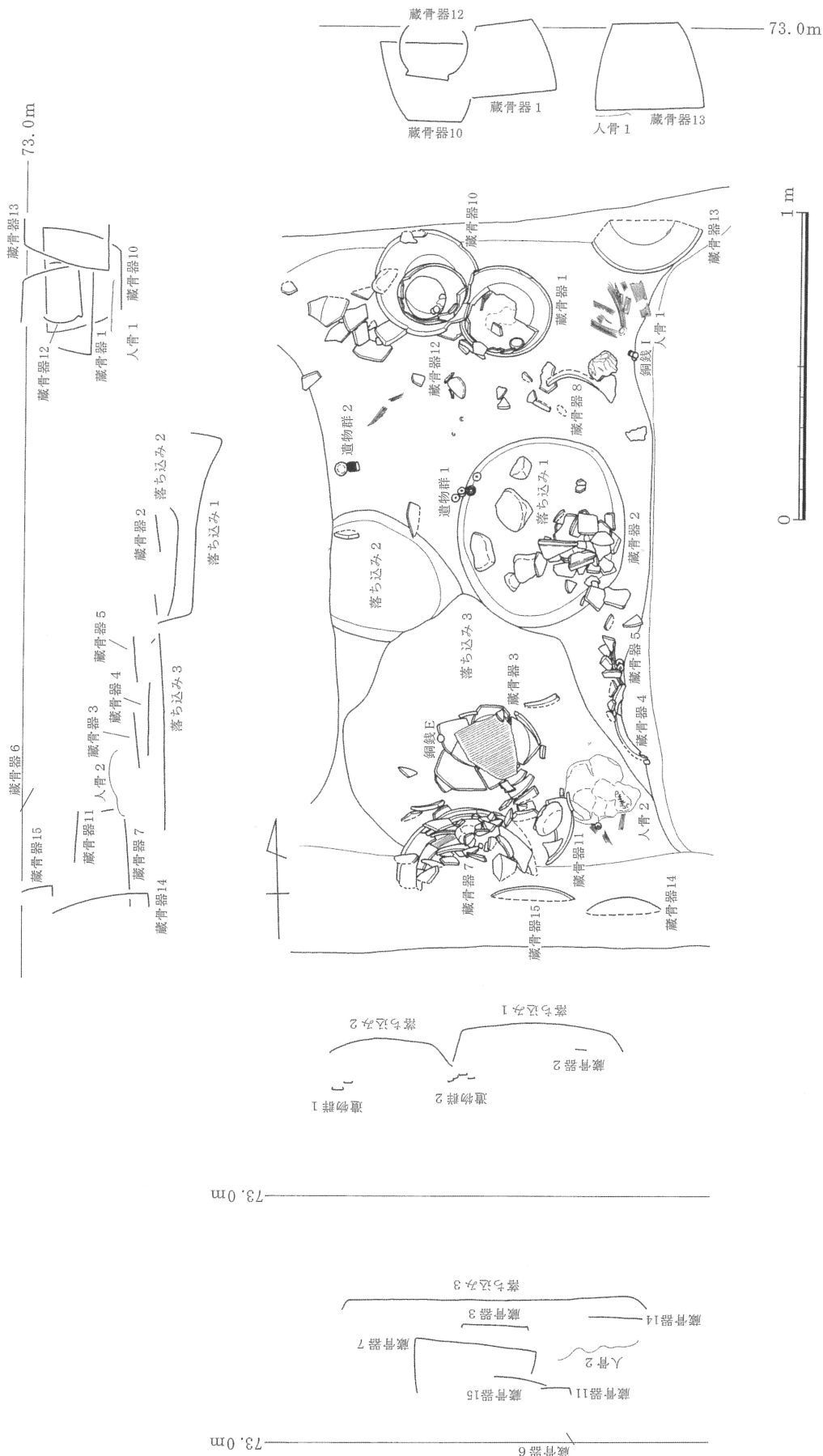
## 出土遺物について（第37～39図、図版33～36）

遺構に伴う遺物 近世墓地遺構に伴うものと判断した遺物のほか、その可能性が高いものも含んでいる。1～12は棺あるいはその可能性が高いものである。1～10は瓦質甕で、全形が復元できたものでは6のような大型品と1・2のような小型品があったことが知られる。口縁直下に波状文を持つもの（1～5）と持たないもの（6）、口縁端部を肥厚するもの（8・9）と屈曲させるもの（1～6）といったバリエーションがある。12は鉄釉の甕。11は瓦質の蓋と思われる。蔵骨器2として取り上げた破片群の中に入っていたが、蔵骨器2の本体である9・10とは径が合わない。蔵骨器2の周辺からは複数の六道銭が出土しているので、ほかの埋葬施設に伴うものであった可能性が高い。

13～16は副葬品あるいはその可能性が高い陶磁器である。13と15は碗のミニチュア品。13は蔵骨器1から出土。15は染付もあり、底面は若干突出する。17世紀のものと思われる。14は半裁された土鈴で、15の内部に収まっていた。16は肥前の染付小碗で、17世紀後葉のもの。口縁部が全周欠けており、意図的なものの可能性がある。14・15は遺物群1に、16は遺物群2に認定したものの。

65～125は銅銭で、うち、65～96は確実に六道銭として用いられていたと判断できるものである。97～125については直接遺構に伴うものとしては取り上げることができなかったが、六道銭に用いられたものとみて間違いのないものと思われる。銭種には宋銭と寛永通宝があり、同じ六道銭に用いられたと考えられるものの中で両者は共伴していない。宋銭はいずれも北宋代のもので、景德元宝（1004 初鑄年。以下同じ）（120）、天聖元宝（1023）（79・80・121）、景祐元宝（1034）（122）、治平元宝（1064）（65）、熙寧元宝（1068）（123）、元豊通宝（1078）（81・125）、元祐通宝（1086）（65・82）、紹聖元宝（1094）（83・84）、聖宋元宝（1101）（124）がある。寛永通宝では、いわゆる「古寛永」（67など）、「文銭」（69など）、「新寛永」（70など）がある。

各遺構などにおける遺物の組み合わせは後掲の表を参照していただきたい。



第37図 春日率川上陵 遺構平面図および垂直分布図 (1/20)

**遺構に伴わない遺物** 本来は近世墓地に伴うものであるものの、埋葬行為の繰り返しや、陵墓地編入後の工事によって攪乱されてしまったと思われる遺物がそのほとんどを占める。一方で、わずかながらに含まれている近世墓地化以前の遺物が注目される。

17～20は埴輪である。17～19は円筒埴輪の胴部と思われ、19の外面では1次調整タテハケののち2次調整ヨコハケを確認できる。20は蓋形埴輪の立飾りで、線刻を持ち、内側縁が付く。赤色顔料の痕跡が見られる。いずれも野焼き焼成と思われる。

21は石鍋で、突出度の高い台形の鐺を持つ。その形状は木戸氏分類のⅢ類-aに該当すると思われ、12世紀から13世紀にかけてのものである可能性がある<sup>(4)</sup>。

22～24は土釜で、22・23はいずれも菅原氏分類の大和H3型である<sup>(5)</sup>。24は通常のものに比べて著しく小さく、ミニチュア品かとも思われるが、煤が付着しており、実際に使用された痕跡がある。いずれも中世後期のものであろう。

25は東播系須恵器の片口鉢である。口縁端部が断面三角形で、森田氏編年の第Ⅷ期、12世紀後葉に相当するものと思われる<sup>(6)</sup>。

26・27は瓦器碗。26は川越氏編年の大和型第Ⅲ段階A型式に相当するものと思われ、12世紀末か<sup>(7)</sup>。27は13世紀後半になろうか。

28～33は瓦質土器。28～31は播鉢で、32は輪花型のいわゆる奈良火鉢。33は脚付の浅鉢と思われる。28～30は14世紀末～15世紀半ば、31は15世紀後半のものか。

34は古瀬戸の瓶子の肩部で、波状文が見られる。15世紀代か。35～37は信楽の播鉢で、35は15世紀末～16世紀前半。38と39は備前の甕と播鉢で、いずれも間壁氏のⅣB期に相当し15世紀後葉のもの<sup>(8)</sup>。40・41は中国・龍泉窯系の輸入品で16世紀。

42・43は土師皿で、いずれも17世紀代。42は灯明皿として用いられていた痕跡の煤が付着する。

44～46は炮烙。いずれも難波氏分類のC類にあたるものと思われる<sup>(9)</sup>。

47は瀬戸・美濃の天目茶碗である。17世紀前半か。

48は土瓶、49は行平埴の口縁部で50は底部。幕末のもの。

51～54は染付茶碗。51は薄手の作りで内面にナゲ痕が見え、17世紀代と思われる。52は見込に蛇の目釉剥ぎを施しており、17世紀後半～18世紀前半のもの。53は17世紀後半、54はコンニャク印判の菊花文で18世紀末。55は瀬戸のいわゆる端反り碗。19世紀。57は広東碗の高台であろう。幕末。56・58～60は染付の皿。56には墨弾きの技法が用いられている。17世紀後半。58は内面が花唐草文で、18世紀のものであろう。59は見込に松竹梅文を持ち、「渦福」の裏銘を持つ。18世紀後半か。61は肥前産青磁の壺の口縁。60は中国・景德鎮窯系の輸入品。角皿であろう。62・63は中国からの輸入品と思われる青磁で、62には魚文が見られる。

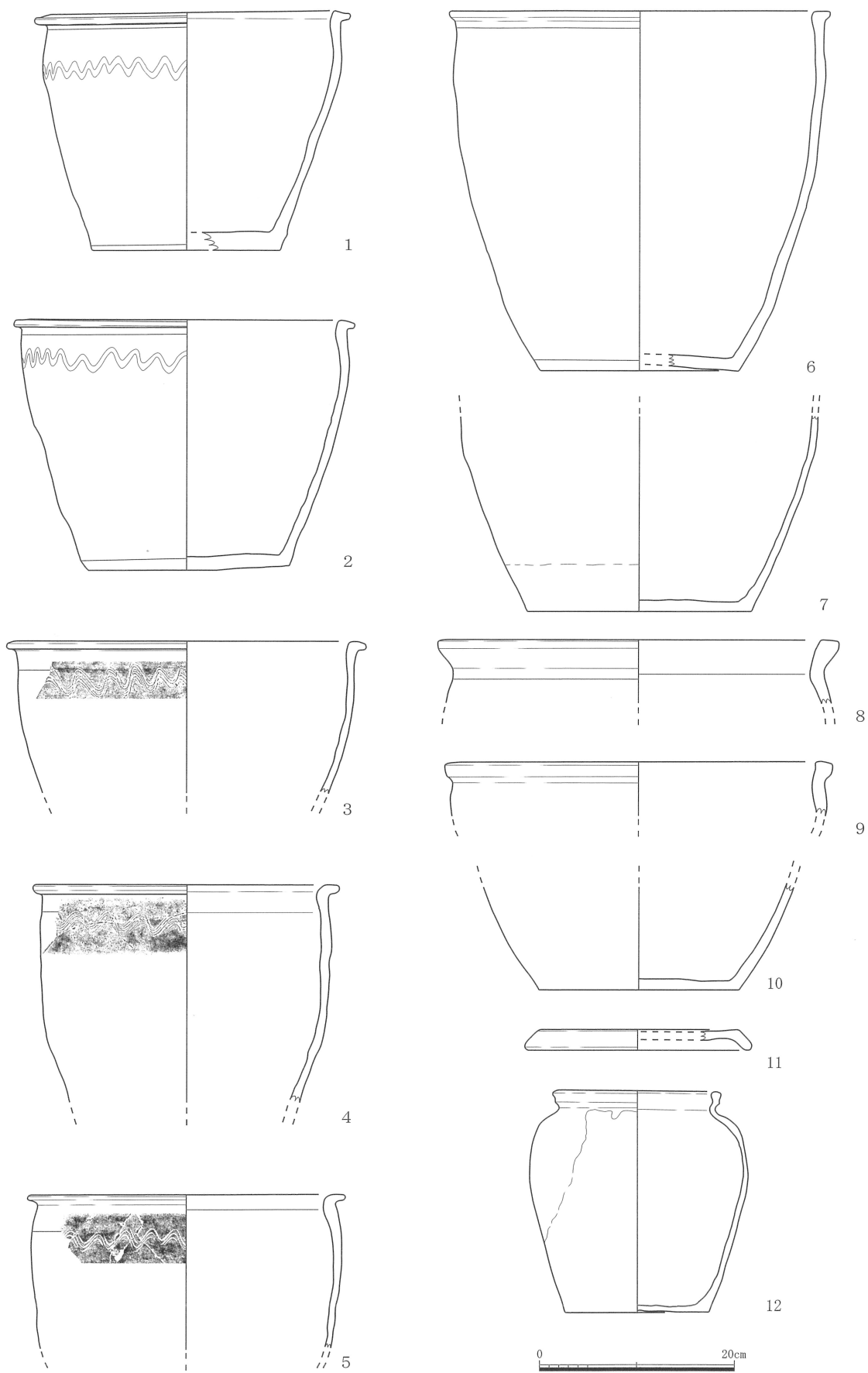
64は3面を平滑に加工した石製品で、硯の可能性が高い。副葬品であったものであろうか。

なお、今回図化していないが、鉄滓が大小9点出土している。時期は特定できないが、近隣で鑄造あるいは鍛冶などの活動が行われていた可能性が高い。

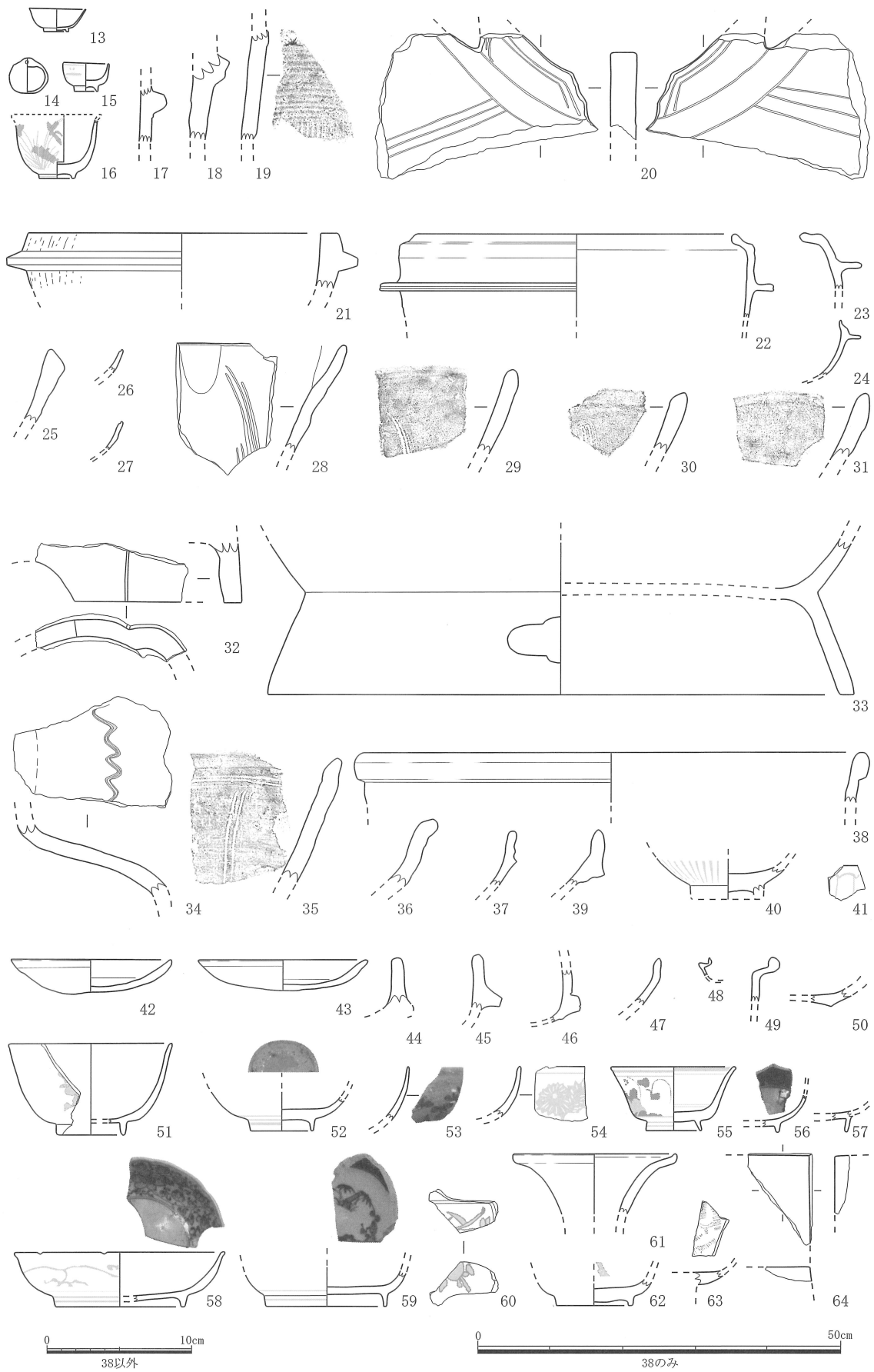
## ま と め

出土遺物については、まず古墳時代のものがあり、それからかなりの空白期間を経て12世紀後半から13世紀にかけての時期にひとつのまとまりがあり、再びやや間をおいて、14世紀後半からは19世紀のものまでが断続的に認められる、とまとめることができよう。これは今回の掘削範囲でのことであり、ここで遺物が見られない時期についても、隣接地点から出土する可能性は多いにあることを注意しておきたい。

(有馬 伸)

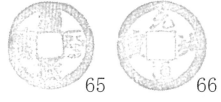


第38図 春日率川上陵 出土品実測図 (1) (1/6)



第39図 春日率川上陵 出土品実測図(2) (1/4・1/8)

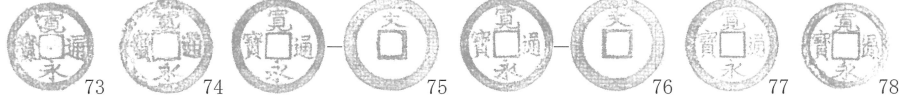
蔵骨器 5



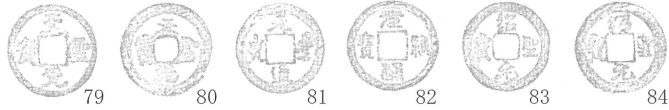
蔵骨器 7



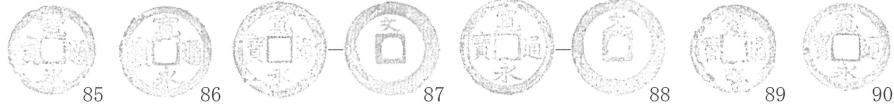
蔵骨器 10



骨 2



遺物群 1



遺物群 2



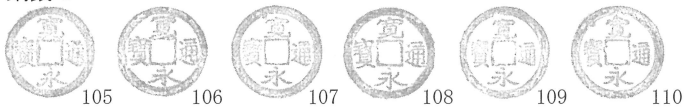
銅銭 A



銅銭 B



銅銭 C



銅銭 D



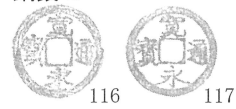
銅銭 E



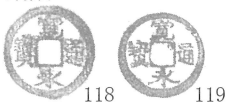
銅銭 F



銅銭 G



銅銭 H



銅銭 I



銅銭 J



第40図 春日率川上陵 出土品実測図 (3) (1/2)

第2表 各遺構における遺物一覧

遺構名等	棺	棺の向き	副葬品	六道銭	備考
蔵骨器1	瓦質甕(1)	倒置	磁器(13)	無	
蔵骨器2	瓦質甕 (9・10)	正置	?	?	瓦質蓋(11) 伴うか 銅銭A~Dのいずれかが伴うか
蔵骨器3	瓦質甕(7)	正置	漆器	?	銅銭E・Fが伴うか
蔵骨器4	瓦質甕(5)	倒置	?	?	
蔵骨器5	瓦質甕(8)	倒置	?	治平元宝×1(65) 元祐通宝×1(66)	
蔵骨器6	瓦質甕(3)	倒置	?	?	
蔵骨器7	瓦質甕(6)	倒置	漆器 数珠?	古寛永×2(67・68) 文銭×1(69) 新寛永×3(70~72)	
蔵骨器8	瓦質甕	倒置	?	?	棺は粉砕のため実測不可
蔵骨器10	瓦質甕(2)	正置	漆器	古寛永×2(73・74) 文銭×2(75・76) 新寛永×2(77・78)	
蔵骨器11	瓦質甕(4)	倒置	鉄器?	?	銅銭G・Hが伴うか
蔵骨器12	鉄釉甕(12)	倒置	?	無	
蔵骨器13	瓦質甕	倒置	—	—	調査対象外
蔵骨器14	瓦質甕	倒置	—	—	調査対象外
蔵骨器15	瓦質甕	倒置	—	—	調査対象外
人骨1	木棺?	—	—	?	銅銭Iが伴うか
人骨2	木棺?	—	—	天聖元宝×2(79・80) 元豊通宝×1(81) 元祐通宝×1(82) 紹聖元宝×2(83・84)	
遺物群1	?	—	磁器(15) 土鈴(14)	古寛永×2(85・86) 文銭×2(87・88) 新寛永×2(89・90)	土器棺であったなら倒置
遺物群2	?	—	磁器(16)	古寛永×6(91~96)	土器棺であったなら倒置
銅銭A	—	—	—	古寛永×5(97~101)	蔵骨器2付近
銅銭B	—	—	—	古寛永×3(102~104)	同上
銅銭C	—	—	—	古寛永×6(105~110)	同上
銅銭D	—	—	—	古寛永×1(111)	同上
銅銭E	—	—	—	新寛永×2(112・113) 判読不明×1	蔵骨器3付近
銅銭F	—	—	—	古寛永×2(114・115) 判読不明×1	蔵骨器3付近
銅銭G	—	—	—	古寛永×2(116・117)	蔵骨器7付近
銅銭H	—	—	—	古寛永×2(118・119)	蔵骨器7付近

遺構名等	棺	棺の向き	副葬品	六道銭	備考
銅銭 I	—	—	—	景德元宝×1 (120) 天聖元宝×1 (121) 景祐元宝×1 (122) 熙寧元宝×1 (123) 聖宋元宝×1 (124)	人骨 1 付近
銅銭 J	—	—	—	元豊通宝×1 (125)	蔵骨器 11 付近

註

- (1) 有馬 伸「開化天皇 春日率川坂上陵鳥居改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第61号陵墓篇、2010年。  
なお、前稿第35図中において「遺物群 1」と「遺物群 2」のキャプションが入れ替わっていた。お詫び申し上げます。
- (2) 石田茂輔「開化天皇陵鳥居建替工事の立会調査」、『書陵部紀要』第28号、1977年。  
有馬 伸「開化天皇 春日率川坂上陵鳥居改築工事に伴う立会調査」、前掲註(1)。
- (3) 山川 均「大和の近世墓－発掘事例の検討から－」『関西近世考古学研究』VI、関西近世考古学研究会、1998年。
- (4) 木戸雅寿「石鍋」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、真陽社、1995年。
- (5) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集、同朋舎、1983年。
- (6) 森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群に中心に－」『神戸市立博物館 研究紀要』第3号、神戸市立博物館、1986年。
- (7) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集、前掲註(5)書。
- (8) 間壁忠彦『備前焼』（『考古学ライブラリー』60）、ニュー・サイエンス社、1991年。
- (9) 難波洋三「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1986年度、京都大学埋蔵文化財研究センター、1989年。





1 蔵骨器 1



2 蔵骨器 10



3 蔵骨器 7



4 蔵骨器 12



1 藏骨器 11



2 藏骨器 6



3 藏骨器 4



4 藏骨器 5



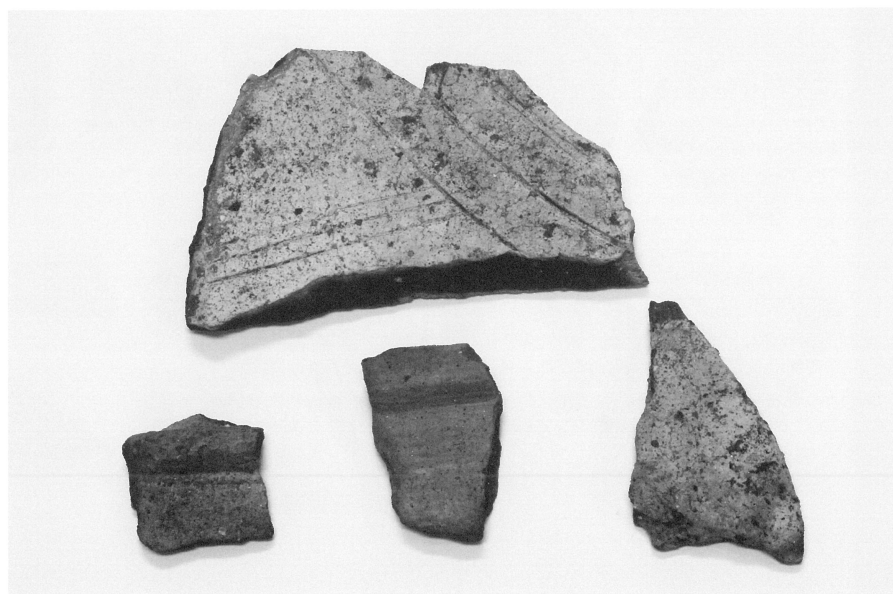
5 藏骨器 3



1 藏骨器 2



2 副葬品



3 蓋形埴輪・円筒埴輪



1 中世遺物



2 近世遺物